審美補綴製作の要点

～口腔内に調和する補綴物～

医療法人S&H田中ひでき歯科クリニックインプラントセンター
兒玉　邦成

昨今、審美補綴治療における患者の要求が高度化する中、患者を満足させる結果を実現するにはチェアサイドとラボサイドでの緊密な連携が必要不可欠であり、歯科技工士も補綴治療に積極的に参加する姿勢が必要だと考える。

治療過程では、歯科技工士も患者とコミュニケーションをとり、抱えている問題点はもちろんながら患者の要望を把握し、治療結果のイメージを共有することが審美補綴治療を成功させるために重要である。

そして、患者の要望を最大限加味して製作された補綴物の色調や形態は、患者の顔貌や口唇、隣在歯、歯周組織、下顎運動などに調和し、装着された補綴物は長期的に安定した状態で保たれなければならない。

審美補綴が目指す歯冠形態は天然歯同様の自然観のある形態であることは言うまでもないが、重要なのは、天然歯の機能的な形態の特徴が補綴部位に正しく適応する様に反映されているかである。この様な歯冠形態は補綴装置に自然観を与えるだけではなく、口腔内に長期的に安定した状態で保たれることにもつながってくる。

近年ではCAD/CAMによる補綴製作により経験の浅い歯科技工士でも、簡単にそれなりの補綴装置が製作できるようになった。しかし、天然歯牙の形態や機能的特徴、歯周組織、咬合などの普遍的な知識がなければ様々な口腔内の状況に合わせて補綴形態を変化させ、口腔内に審美的、機能的に調和する補綴装置を製作することは難しい。

さらに、デジタルテクノロジーを使用するにあたって重要なのは現状のデジタル機器の優位な点と問題点をしっかり理解し効果的に活用することである。口腔内スキャナーを使った補綴製作を例に挙げると、歯肉縁下やロングスパンのスキャン精度、3Dプリンター模型の精度など、デジタル機器にもまだまだ課題は多くあり、知らずに使用していると思わぬトラブルを招くことになる。

技工作業がアナログであろうがデジタルであろうが、最終的な補綴物のクオリティーを最優先すべきであり、簡略化を優先してクオリティーを下げてしまうようなことがあってはならない。

そこで今回は、デジタルデンティストリーを含めた審美補綴製作時に必要な基本的な知識と要点を中心に、当院での審美補綴治療の流れと治療を進める中で歯科医師とどの様なやりとりを行っているのかを、いくつかの症例を通して紹介したい。

略歴

2006年　宮崎歯科技術専門学校卒業

2007年　大阪セラミックトレーニングセンター宮崎校　全日コース卒業

2007年　大阪セラミックトレーニングセンター宮崎校　アシスタント

2009年　下川歯科医院入社

2014年　医療法人S&H 田中ひでき歯科クリニック入社

2016年　白水貿易　VITA VM9 インストラクター

以後、現在に至る。

所属グループ

日本歯科技工士会、福岡技工研究会、WGG